

# 中国語のヴォイスと動詞の形態

## ——中国語のヴォイス（1）

鵜殿倫次

- 0 はじめに
- 1 英語、日本語のヴォイスと動詞の形態
  - 1.1 英語、日本語のヴォイスの問題圏
  - 1.2 動詞の‘形態変化の方向’
    - 1.2.1 英語は他動詞から受動形が作られる
    - 1.2.2 日本語の動詞形
- 2 中国語のヴォイスと動詞の形態
  - 2.1 中国語の受動文
    - 2.1.1 “被”構文と“把”構文
    - 2.1.2 「意味上の受動」と動詞の形態
    - 2.1.3 自他動両用動詞
    - 2.1.4 助動詞＋動詞による受動
    - 2.1.5 “让”と能動・受動
  - 2.2 受動における動詞の形態

### 0 はじめに

中国語のヴォイスの現象は、動詞の形態とどのような関わりがあるのか。これを本稿で明らかにしたい。ここで言う「動詞の形態」とは、印欧語の語尾変化等のような、動詞語幹に他の形態素が付加する場合だけでなく、動詞への補語などの後置成分、副詞等の前置成分、助動詞等の他の動詞が付加された述語全体を指すことにする。中国では、これを述語（谓语）の構造として扱うけれども、例えばドラグノフは『汉语的动词范畴』の中で、動詞の実詞としての用法をその「形態構成」（形式的な構成）が可能な点で特徴づけており、動詞の形態を動詞重畳や補語、アスペクト詞等が付加した全体の意味で用いている。また英語でもヴォイスにかかわる受動形 be-edなどを「動詞の形態」とよぶことがあるので「形態」の語をそのように使用する。そこで、まず次の文を見てみよう。

- (1) a 张三打死了李四      (1) b 李四被张三打死了.      (1) c 李四打死了.  
(2) a 解放军解放了北京。      (2) b 北京被解放军解放了。      (2) c 北京解放了。

(1) a (2) a は、動作主体が主語の能動文だが、動詞形“打死了”“解放了”<sup>(1)</sup>は、(1) b (2) b のような動作対象が主語になり“被”が現れる受動文でもそのまま使われる。また(1) c (2) c の“被”なし受動文でも、動詞形は能動文(1) a (2) a と変わりがない。英語では、能動形“kill”受動形“be killed”のように受動形は能動形と異なるし、日本語も「殺した」「殺された」のように動詞形は異なる。これから見ると中国語には能動形・受動形というものがないように見える。中国語の受動はどのように動詞の形態が構成されるのだろうか？

## 1 英語、日本語のヴォイスと動詞の形態

### 1.1 英語、日本語のヴォイスの問題圏

まずヴォイスとは何かということだが、柴谷 1982<sup>(2)</sup>は、日本語・英語のヴォイスについて、次のような説明を行っている。

動作主から発せられた動作が対象に行きつく状況を二つの違った側（または視点）から述べる文機能である。動作主の側から述べる表現を能動態といい、対象の側から述べる表現を受動態という。これら二つの表現方法はそれぞれに統語特徴を有していて、能動態では動作主が主語となり、受動態の場合には対象が主語となる。さらに多くの言語では動詞の受動形は、能動形と違った形態的特徴を持っており、形態論上から受動態を規定することもできる。つまり受動態というものは、能動文と受動文の関係において次の三点を中心に把握されるということである。

- A 意味的に対応する能動文では目的語として起こる、対象を表す名詞句が文法的な主語として起こる。
- B 動詞に受動態を示す形態的特徴が現れている。
- C 動作主は表現されなくても良いが、表される場合には動作主を示す要素（格変化、助詞、前置詞等）を伴う。

このABCはヴォイスを規定する“必要条件”なのだろうか。英語学では一般に、この三つが受動態の必要条件と考えられているようだ。柴谷は「上の三つの特徴が同時に起こっている場合のみを受動態と規定する学者

もいる」とし、例として福村虎治郎『英語態 (Voice) の研究』を挙げている。英語の文法では、B の動詞の形態的特徴が active と passive を分ける条件とする見方が根強い。しかし柴谷は「三つの特徴が別個に起こっている表現も考察範囲に入れられるのが普通である」と述べている。つまり、三つの特徴を同時に備えていない場合にも、受動というものが考えられるとするのである。

鷲尾・三原 1997<sup>(3)</sup> も、英語学では印欧語の伝統を反映して、ヴォイスとは動詞の形態から定義されるとし、例として大塚高信編『新英文法辞典』を挙げる。同辞典の「Voice (態)」の項でも、B (動詞に受動態の特徴が現れること) を必要条件と考えている。

主語と、動詞の表す動詞との主格関係を表す動詞の形態をいう。Jim read 'Hamlet' と 'Hamlet' was read by him のような変化をいう。前者を能動態 (ACTIVE voice) 後者を受動態 (PASSIVE voice) という。両者の伝える客観的事実そのものは同じであるが、話者の観点が違うのであって、前者は動作主の観点から、後者は動作を受ける対象物の観点から述べている。(後略)

しかし鷲尾・三原は、日本語ではヴォイスの定義はかなり様相を異にするとし、その例として国語学会 (編) 『国語学辞典』の時枝誠記の定義をあげる。そして国語学におけるヴォイスの適用範囲は英語学におけるそれとは比較にならないほど広いと述べている。同辞典の「相 (Voice)」の項では、次のように説明されている<sup>(4)</sup>。

一般に、自動・他動・受け身・可能・敬譲・使役等の事実をさす。三矢重松は、自他を動詞の「性」、受身・可能・使役・敬譲を「相 (スガタ)」、と名づけ、それぞれ被益相・可能相・敬相とし... (後略)

柴谷 1982 も、ヴォイスは、能動態・受動態という視点の転換であると見ており、ヴォイスに広い含みを認める。それは時枝の定義と一致しており<sup>(5)</sup> これを下の図にまとめている。

能動態	他動詞	使役形
受動態	自動詞	可能形

この図の意味を、私なりに解釈すれば、次の 1) から 4) ようになる。

1) 他動詞／他動詞・受身助動詞

「茶碗を割る／茶碗が割られる」のような他動詞への受身助動詞の付加。

2) 自動詞／他動詞

「茶碗を割る／茶碗が割れる」のような形態関係のある自動詞・他動詞の派生。

3) 自動詞・使役助動詞／自動詞

「彼を笑わせる／彼が笑う」のような自動詞への使役助動詞の付加。

4) 他動詞／他動詞・可能助動詞

「茶碗を割る／茶碗は手で割れる」のような他動詞への可能助動詞の付加。

これを整理し直してみると、次のようになる。

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| ①他動詞／他動詞 + $\alpha$ (受身、可能助動詞) | 受動が複雑     |
| ②自動詞 + $\beta$ (使役助動詞)／自動詞     | 能動が複雑     |
| ③派生自動詞／派生他動詞                   | どちらとも言えない |

いっぽう鷲尾・三原 1997 も、ヴォイスをこのように広く捉えることは、日本語や諸言語の比較に携わる者にとって有効であるとしている。

より一般的に言えば、ある行為・出来事を認識し、言語化する際、どのような観点からそれを行うか —— 行為者が何を行ったか〈窓を割った / He broke the window〉という観点からか、対象が何をされたか〈窓が割られた / The window was broken〉という観点からか、対象に何が起こったか〈窓が割れた / The window broke〉という観点からか、あるいは、行為者が何を引き起こしたか〈窓を割らせた / He made him break the window〉という観点からか —— などに関わる言語形式と意味の問題は、すべて〈ヴォイス的なもの〉と扱う。英語学的厳密さからすれば、要するにルーズな用法と言えなくもないが、そもそもヴォイスという概念が、厳密な意味で文法理論に属するものであるかどうかさえ明らかでなく、厳しい概念規定によって考察対象をわざわざ狭める必要もないのでこのような直感的把握に留めておくのがよいと思われる。

以下の検討においても、「ヴォイス」の意味は、このような広い意味で用いることにする。

## 1.2 動詞の‘形態変化の方向’

柴谷は受動態の一般的条件A B Cのうち、Bで「動詞に受動態を示す形態的特徴が現れている」という条件をあげ、このA B Cは必要条件とは考えていないが、しばしば受動態と付帯して現れる特徴であるとし、「多くの言語では、動詞の受動形は、能動形と違った形態的特徴をもっている」としている。どのように受動形は能動形と違うのか。

### 1.2.1 英語は他動詞から受動形が作られる

柴谷は、英文法における受動態は、動詞の形態変化によって定義づけられているとする。受動文では、動作の対象（目的語）が主語となり、動詞はbe-Vedの形態的特徴をとる。

(3) The police *arrested* criminals.

(4) Criminals *were arrested* by the police.

これは受動態の3特徴のA B C（対象名詞が主語、動詞に受動態を示す形態的特徴がある、動作主を示す要素がある）をすべて満たす。だがこのほかにBを欠きAの特徴だけを備えた表現があり、態の問題として扱うかどうかは議論はあるが、興味深いものとする。

(5) I *sell* these books.

(6) These books *sell* quite well.

(6)のような文について柴谷は「これらの文は普通、他動詞として使われる動詞が自動詞のように使われているのであるが、能動構文では目的語になるものが主語になっているという点で受動態に通じている。しかし受動の形態的特徴がないばかりか、\*These books sell quite well by me が非文であるように、動作主をbyで表すこともできない。このような表現は、一般的に主語となっているものの性状が、言い表されている状況を引き起こす原因となっている場合に可能なものであって、wellやeasilyといった副詞を伴うことが多い」としている。これを受動態とはしていないが、Aだけの特徴をもち、受動形が能動形とは異なるというBの特徴をもたない特殊な受動態と解釈できることを示唆している。鷲尾・三原1997は「このような中間構文は動詞の形態としては(3)のような能動態の他動詞と同じだから2種類の文の対立は、現代英語ではヴォイスの問題から外れることになる」としながら、これらを含む広い意味でのヴォイスの問題圏と言

うべきものを考えている。

英語では一般的に「能動・受動は異なる動詞形態をもち、受動形は能動形から生み出され、受動形のほうがより複雑な形をもつ」。しかし発想を変えて *sell* や *open* のような自他が同じ動詞形、あるいは *lay* と *lie* のように同じ形態素から派生した自他の動詞が作る文の、構文としての対立をヴォイスと捉えることもできるのではないだろうか。

さて柴谷 1982 は、一般に能動形→受動形へと形態変化が‘方向’をもつとする理由について「ふつう動詞の受動形は能動形より複雑であったり、受動文とそれに対応する能動文とを比較しても、前者のほうが構造的に複雑であるということは、(略) 受動態は心理的な傾向に沿わない、有標 (marked) の表現であるということの裏付けである」とする。柴谷の言う「心理的な傾向」とは、動作が動作主から対象へと向かうので、動作主が主語になる能動の方が自然だということの意味する。もちろんこれは対格型の言語を念頭においているが、はたして多くの言語を視野に入れた場合でも、やはり受動が有標と言えるのだろうか。例えば上にのべた時枝のような広いヴォイスの定義を行うと、能動形→受動形への形態変化の方向があるとか、受動がより複雑であるとか、受動のほうが有標であるということは言えないことになる。例えば自他両用の派生動詞では、他動「止める」と自動「止まる」は他動から自動が派生したとは説明できない。つまり *tom-er-u/tom-ar-u* における “er” は「もえる *moy-er-u*」「もやす *moy-as-u*」の場合は自動側にも現れる。派生動詞の場合、ある一方向への派生ということは言いにくい。

## 1.2.2 日本語の受動の動詞形

### 1.2.2.1 他動詞への助動詞の付加

つぎのものは他動詞「叱る」に受身の「れる」がついて受動の動詞形が作られている。

- (5) 母親が子供を叱った。                      (6) 子供が母親に叱られた。

しかし、日本語では可能助動詞がつく次のようなものも受動のヴォイスに含められる。

- (7) 書店がこの本を売る。                      (8) この本は書店で売れる。  
(9) この実を手で割る。                      (10) この実は手で割れる。

(8) は、さきほどの (4) *These books sell quite well.* では、他動自動が同形

であったのとは異なり、“売る→売れる”のように他動から自動が生じている。可能形が受動態の性質を帯びるのは、柴谷 1982 によると可能形が「対象の可能的性質」を表す場合であり、これに対し (12) のように可能形が動作主の能力を示す場合は、文法関係において対象（数学が）は目的語であり主語ではない。だから対象が主語となる受動態の性質は帯びないとする。

(11) 私は数学を教える。 (12) 数学が私には教えられる。

### 1.2.2.2 同じ形態素から派生される自動詞・他動詞

すでに触れたように、日本語ではこの他に、形態関係のある自動詞と他動詞の関係もヴォイスに含まれる。これらは語彙的な派生であり、自他の形態的關係は不規則である。柴谷の説明をしてみる。

他動 (13) 布を裂く。 sak-u	自動 (13) '布が裂ける。 sak-e-r-u
(14) 戸を開ける。 ak-e-r-u	(14) '戸が開く。 ak-u
(15) 石を動かす。 ugok-as-u	(15) '石が動く。 ugok-u
(16) 血を止める。 tom-e-r-u	(16) '血が止まる。 tom-a-r-u
(17) 手を離す。 han-as-u	(17) '手が離れる。 han-a-r-e-r-u
(18) 犯人を逃がす。 nig-as-u	(18) '犯人が逃げる。 nig-e-r-u
(19) 子供を起こす。 ok-os-u	(19) '子供が起きる。 ok-i-r-u

このような自他対応動詞は、つねに他動詞の語幹から自動詞が派生するわけではない。共通の語幹から、一定の形態的な派生のあと、ふたつの動詞形が生じる。一般的傾向としては「漬ける／漬かる」のような自動詞が -ar-、他動詞が -er- とされる対応が多く、また自他の接辞については、一般的に自動詞は -ar- と -e- が圧倒的に多く、他動詞は使役の -(s)ase- と史的に関係がある -as- 及びその異形 -os-、-s- が多く使われるとする。

### 1.2.2.3 自他同形動詞

以上は共通の語根から派生し形態の違いを見せる対応であるが、「戸を開（ひら）く／戸が開（ひら）く」「水分を増す／水分が増す」のように、自他同形のものもある。英語でもつぎのようなものがある。これも柴谷の説明である。

(20) *open the door* (20)' *the door opens*

(21) *widened my knowledge* (21)' *my knowledge widened*

英語で自他で形態的な関係をもって対応する動詞には“lay / lie” “raise / rise”のように形態の変化するものもある。柴谷は、このような自他同形類

の動詞には、一般的には“widen”や“enlarge”のように形容詞から派生されて自動詞や他動詞になるものが多いとされる。自他動のどちらがまず生み出されるのか、については根拠のある説明はできないという。

さきにも述べたが“open”のような自他同形動詞とヴォイスの問題だが、次の a) b) c) の場合はどうなのか。c) は受動ではない(動詞形が“be opened”とならず、“The door opened by him.”のように動作主を by で表すことができない)が、もし“sell”の他自動の転換がヴォイスに入るのなら、b) も c) も動作対象が主語となるのだから、日本語のような定義をするなら能動・受動のヴォイスの対立をなすと言いうることになる。

- a) He opened the door.
- b) The door was opened by him.
- c) The door opened.

#### 1.2.2.4 自動詞への助動詞の付加

ところで日本語では自動と使役形との関係もヴォイスの問題圏に入る。

- (22) 私が先生を笑わせた。                      (22)'私の話で先生が笑った。
- (23) 私がみんなを驚かせた。                      (23)'私にみんなが驚いた。

使役形は自動詞+助動詞となる。さきの能動→受動とは逆の自動(受動)→使役となり、能動である使役形のほうが複雑な形態となる。柴谷は「ふつう動詞の受動形は能動形より複雑で(略)受動態は有標(marked)の表現である」とするが、英語でも“have”による使役～受動の構文をヴォイスの圏内に考えれば、使役は当然有標であるから、能動の方が形態が複雑で有標ということになりそうだ。

#### 1.2.2.5 能動・受動の動詞形態の違いとは何か

日本語では、助動詞が接尾する場合(他動+受身、他動+可能、自動+使役)および自他が形態的關係をもって対応する場合、多くは同じ動詞語根、動詞的形態素を共有しながら、能動と受動は形態的に異なる。一部で自動と他動が同形で形態が一致することがある。このような観点から中国語を見ると次の点が問題になる。

- ① 受動構文を形成する場合、受動のほうが特別な形態構成を必要とするのか。
- ② 能動一般と受動は形態の違いがあるのか。それとも能動の中の特別な動詞形と受動が形態的に一致する形で、形態構成がなされるのか。



## 2. 中国語のヴォイスと動詞の形態

### 2.1 中国語の受動文

中国語の「受動」とは何かは、難しい点がある。一般には、動作対象となる名詞が主語となる“我被他打了。”“茶碗打破了。”のような文が受動である。だが動作者名詞が存在せず対象名詞が賓語の位置にある、例えば“黄土高原地区常吃小米粥。”〈黄土高原地域では、よく粟の粥をたべる〉のような不定人称文、また“战国时代在黄河流域形成了好几个汉民族国家”〈戦国時代、黄河流域には多くの漢族国家が形成された〉のような存現文の類も受動文かもしれない。しかし、ここでは対象が主語となるものだけを取り上げることにする。

対象名詞が主語となる受動文というと、“被”構文を想起するが、いままで我々が見てきたヴォイスの観点から見ると、受動はそれ以外にも存在する。すなわちいわゆる能動／受動のほか、他動／自動、他動／可能、自動／使役などもヴォイスの対を形成する。

#### 2.1.1 “被”構文と“把”構文

受動構文としては“叫”“让”および“被”による受動構文があるが<sup>(6)</sup>、ここでは“被”構文の述語動詞について見てみる。たとえば(24)(25)の場合、“打破了”は他動文としてSVO文や“把”構文を可能にする。また(26)(27)(28)の場合、受動文として“被”構文や“被”なし受動文を可能にする。だが、どんな動詞形でもこのように能動・受動を可能にするわけではない。たとえば“打”の場合(27)’と(28)’は受動文としては成立しにくい（とくに(27)が成立しにくいのは、注目すべきだ。）。

(24)她打破了茶碗。〈彼女は茶碗を割った〉 (24)’她打了茶碗。

(25)她把茶碗打破了。〈彼女は茶碗を割った〉 (25)’她把茶碗打了。

(26)茶碗被她打破了。〈茶碗は彼女に割られた〉 (26)’茶碗被她打了。

(27)茶碗被打破了。〈茶碗は割られた〉 (27)\*茶碗被打了。

(28)茶碗打破了。〈茶碗は割れた〉 (28)\*茶碗打了。

ここから分かるのは、中国語では動詞が一定の形態構成（呂叔湘は前後成分と言う）をすると、他動文である“把”構文から受動文である“被”構文、とくに(27)のような動作主のない“被”構文や(28)のような“被”なし構文を可能することである。この場合、動詞形“打破了”は自他両用の

機能をもっている。では中国語では受動ヴォイスを構成する動詞形は、すべて自他両用性をもつのだろうか。

### “把”構文と“被”構文はいかなる文なのか

中国語の他動文には、SVO構文といわれる“把”構文がある。これは中国語の特異な点である。後者は、“被”構文との間で動詞の形態構成において密接な関係をもつ他動文である。いったい“把”構文とはどのような構文なのだろうか。

第一に、“把”構文の対象名詞と“被”構文の主語名詞は、ともに受事者 patient 名詞である点が重要である。“patient”は基本的に動作の影響を受けたり、動作によって状態変化をこうむる名詞である<sup>(7)</sup>。いっぽう動賓(SVO)文における対象名詞は、受事者以外のさまざまな意味役割が可能であり、中には“把”構文に変換することができないものがある。すなわち動詞が他動詞であっても、“看见”のような知覚動詞、“吓”のような感情動詞、“回”のような移動動詞では、目的語は知覚対象、感情の結果、移動の目的地などであり、動詞が“看见了”“回到了”のように後置成分があっても“把”構文にならない。

(29) 我看见了他。

(29)\*我把他看见了。

(30) 我吓了一身的冷汗。

(30)\*我把一身的冷汗吓了。

(31) 我回到了学校。

(31)\*我把学校回到了。

“把”構文の本質について、王力は『中国語法理論』において「処置」と呼んだ<sup>(8)</sup>。王還 1985 は、これを文法用語として使用する場合、主語の意図の有無など主語・動詞関係を含意しやすいが、「処置」はあくまで動詞と対象との意味関係を定義するものと解釈すべきだとし、宋玉柱の定義が妥当として引用する<sup>(9)</sup>。

「文中の述語動詞があらわす動詞が“把”字の受動成分になんらかの積極的影響をくわえ、多く受動成分をして何らかの変化を発生させ、なんらかの結果を生じさせ、或いは何らかの状態におかせる」

この定義によると、“把”構文は、おおむねプロトタイプのな他動を表す構文ということになる。しかも対象名詞が定的 definite<sup>(10)</sup>な性格をもち、このような意味をもった他動文が、つねに同じ動詞形を用いて“被”による受動文に変換できることから、“把”構文は受動と密接に関係することになる。一般に対象に影響、状態変化、結果の残存を生じさせる他動の対象名詞は、つねに定ではない。SVO構文においては、このような他動の対象

名詞が不定の意味を持ちうる。しかし“把”構文の受動者名詞は、多くの場合定的であり、動詞の補語などの後置成分をもつ時にのみ、場合によって不定も可能となる。この点“把”構文は特別な性格がある。

### “把”構文と“被”構文の動詞

ふたつの構文は動詞の形態構成の特徴において共通部分が多いと述べたが、具体的には王還 1984 は、両構文を比較して次のような共通点があるとしている<sup>(11)</sup>。

A) 否定辞は“把”“被”の前にくる。

B) ・動詞には必ず前置成分か後置成分がつく。

・“把”構文ではごく少数の動詞(解決, 消灭など)しか単独で使えない(例: 我们必須把这个问题解决)。“被”構文では一般に二音節動詞は単独で存在できる(例: 你这样做, 总免不了要被大家批评)。多くは後置成分がつくのがふつう(昨天他被大家批评了[一顿])。一音節動詞は必ず前置または後置成分が必要(例: 他被这些人三番五次地骂, 忍不住要发火)。

・“把”構文で使用される前置・後置成分は、すべて“被”構文でも使用できる。“把”構文では動詞のあとに目的語が残る文が四類ある(例: 他把橘子剥了皮など)が“被”構文でも同じように動詞のあとに目的語が残る文が四類可能(例: 橘子被他剥了皮)。

C) どちらも動詞のまえに“给”がつくことがある(例: 二十年被剥削的生活, 把我的性子给变了。)

“把”構文に“给”がマークされると「損なう」意味がある。

D) どちらも自動詞が使われる場合がある。“把”構文では、“你把我的心都哭乱了。”のように精神行為が引き起こされる場合、“把我冷的直哆嗦。”のように状態が引き起こされる場合がある。

“被”構文でも、“李成功被他一说倒愣住了。”のように“说李成功”の関係ではないのに、受動文になるものがある。

E) “把”構文の目的語も“被”構文の主語も specific (特指性) な性格がある。“书被人家拿走了”の主語は限定語がないが、“把”構文の目的語同様、特定のものとして理解される。

F) “把”構文で使えない動詞が“被”構文でも使えない。“有, 在, 当, 得, 起, 象, 属于, 接近, 离开, 依靠”など、とくに他動詞でも両構文で使えないものがある。“被”構文で使えるが、“把”構文で使えないものがある(例: “知道, 看见, 听见, 碰到, 信任, 拥护”など)けれども、“把”構文で使えて、“被”

構文で使えないものは全くない。つまり、“把”構文で使える動詞は、すべて“被”構文で使える。

### “把”構文の動詞(述語)の構成

とくにBの動詞の前置・後置成分の共通性について、劉他 1983 の記述(p. 469-472)によって、詳しく見てみよう。とくに\*印は“把”構文と“被”構文に共通している部分である。例文は劉のものである。

- ①\*アスペクト助詞“了”“着”の付加(把灯熄了/你把这本书拿着)。
- ②動詞重畳(我把我的意见说说)。動作の完成の場合は“了”が必要。
- ③\*補語の付加(他把药放在桌子上了/把门关上)動作が完成し、あとに句がない時は“了”が必要、
- ④\*動詞の後ろに目的語の付加(售货员把零钱找给了我)。給予動詞の間接目的語以外は補語やアスペクト詞が必要。
- ⑤\*動詞の前に結果の意味の状語(別把纸满地乱扔)。
- ⑥意味的に結果を含む動詞はゼロ付加(不把敌人消灭,我们就不得安宁)。

とくに③の補語については次のような補語が可能だ。

- ③-1 結果補語(你把作业写完了再去玩)
- ③-2 方向補語(把饭给我挑回去)
- ③-3 様態補語(他把斧子举得跟头一样高)
- ④-4 数量補語(敌人把他在监狱里关了三个月)
- ③-5 介詞句による補語(把革命事业推向前进)

なぜ普通のSVO文(主動句)とは異なり“把”構文はこのような述語構成の制限があるのだろうか。これは中国語動詞の動詞意味論的な性質に関わりがある。宋玉柱の“把”構文の“処置性”の定義(受動成分に積極的影響をくわえ、多く受動成分をして変化、結果を生じさせ、或いは何らかの状態におかせる)意味を表すには、このような形態構成が必要なのである。

### “被”構文の述語の構成(劉他 1983 p. 482-485)。

- ①\*アスペクト助詞“了”“过”の付加(他被大家说服了/这支部队从来没被敌人打败过)、
- ②\*補語の付加(詳しくは次項)
- ③\*動詞の後ろに目的語の付加(詳しくは次項)、
- ④“被”のまえに状語があり動詞にゼロ付加(你这句话很容易被人误解)

とくに補語については次のように分けられる。

②-1 結果補語（战士们没有被困难吓倒）、

②-2 方向補語（他的钱包被小偷偷去了）、

②-3 程度補語（周扒皮已经被打得半死）、

②-4 動量・時間補語（那个农民被地主训斥了一顿/他爸爸被国民党反动派关了三年）、

②-5 介詞句による補語（他觉得自己好象正在被一股强大的力量推向前方）  
また目的語については次のように分けられる。

③-1 動作の結果生じたもの（我的衣服被钉子挂了一个大口子）、

③-2 主語の受け取り手（九岁的妹妹被卖给了别人）、

③-3 主語の部分（演完了这个杂技，夏菊花的头发被拔掉了一大把）、

③-4 動作の結果主語の置かれる場所（他被送进医院）、

③-5 動賓の慣用句（这项规定被他打了折扣）、

③-6 主語が場所、賓語が受事者（天安门城楼被朝霞涂上了一层红色）

以上からとくに動詞の後置成分（アスペクト助詞、補語、目的語）が両構文の動詞の形態構成に重要な役割を演じていることが分かる。単独の動詞でアスペクト詞の付加だけで述語になれる動詞は、二音節語に限られるがそれも大抵は後置成分がつくことが多い。

“把”構文の動詞述語は多くがこれを変更することなく“被”構文に変えることができる点が重要である。例えば“敌人把他在监狱里关了三个月”は“他被敌人在监狱里关了三个月。”と変換できる。“把”構文の宋玉柱の定義するプロトタイプの他動性の意味を充足する動詞形が、多くの場合受動構文になるということは、中国語の受動の性格も物語る。例えば「人々はこの歌を歌う。」はSVO文（人们唱这首歌。）と言えるが、“把”構文になりにくいいため「この歌は人々に唱われる」も受動文“这首歌被人们唱。”と言えない。中国語では“処置性”のない動詞は受身になりにくいのである。

“把”構文の動詞形態構成が“被”構文と重なり合うということは、中国語の受動は、一定の形態構成をして可能になるプロトタイプの他動と、多くの場合同様の動詞形で受動が言えることを意味する。このように形態構成された動詞述語は、“把”構文と“被”構文（もしくは“被”なし受動文）という対をなすヴォイスの成立を可能にするわけだ（もちろん一部には“被”構文だけを可能にし、“把”構文にならない形態構成もある）。

同じ他動文でもSVO文はすべて“被”構文もしくは“被”なし受動文

と重なりあうわけではない。(24)～(28)で見たように、“茶碗被她打破了。”の場合、たしかに対応する能動は“把”構文と、動賓(SVO)文“他打破了茶碗。”がありうる。これは動詞形“打破了”だから可能なのであり、動詞がアスペクト詞“了”や補語がないSVO文は対応する受動がない。例えば“每天吃饭时,他用筷子打茶碗。”の目的語を主語にした“每天吃饭时,茶碗被他打。”は成立しない。動詞に“了”が付加した“打了”の形は、SVOの“他打了茶碗,(但茶碗没打破).”という文にたいして、受動は“被他打了”は言えるが、“被”なしで“茶碗打了”は受動の意味をもたない。また“被”があっても“茶碗被打了”は言いにくい。このように、SVO文すべてが受動と対応するわけではなく、一定の動詞形態の時だけ受動と対応する。だが“把”構文は常にこうした条件を備えている。この意味で“把”構文が受動文と対応する能動文なのである。

“把”構文と“被”構文とが、多くの場合、同じ動詞述語を使って互いにヴォイスを転換できる場合(例えば“我把房间打扫干净了”“房间被打扫干净了”)、しばしば動詞形は、能動・受動の両用性をもっているが、すべての場合にそうなる訳ではない点が重要である。①構文の働きを介しての両用性(“他打了我。”“我被他打了”)と②動詞形そのものの両用性(“张三打死了李四。”“李四打死了。”)との区別がある。“打扫干净了”は後者である。前者①では、動詞それ自体は自他両用性はない。“我打了”は受動(自動)の意味はなく、“被”を用いた受動構文“我被他打了”となって初めて受動となる。②の動詞の性格は動詞アスペクト的特性のほかにも能動・受動の両用の性質がある。動詞意味論から言うと、かりに「動詞のヴォイス特性」というものを考えると、自他動両用性もしくは能・受両動態性があると言うことができる。

### “被”の働き

“被”構文では、もし述語動詞がヴォイス特性において受動性があれば、“被”は必要条件ではない。しばしば“被”が存在しなくとも、受動構文が成立する。だが必要な補語やアスペクト詞等の動詞後置成分を欠くと、“被”があっても受動は成立しにくくなる。“被”のない場合の受動構文とはいわゆる「自然被動」、「意味上の受動」である。この呼称は、“被”が欠ける受動文が形態的に不全なものというニュアンスがあるが、実際は逆であり、実際には“被”は、限られた場合(動詞形が受動特性をもたず、受動であることを示す必要のある時)にしか使われない。動詞形が、ヴォイ

ス特性において受動とわかる場合、あえて使うと不自然さや被害や不愉快さを加える働きをする。王力は“被”を用いると不如意の意味があると言う<sup>(15)</sup>。尤も“他被大会授予一枚金质奖章。”(李临定 1980 の例文)では、被害の意味はない。“授予”は受動のヴォイス特性はなく“他授予一枚金质奖章。”は(かれは金賞を授けられた)という意味はなく“被”なし受動が言えないからだ。

“被”は前置詞か動詞か助動詞かは別として、“被”には“被”なしの受動(「意味上の受動」)にならない動詞形でも、受動にする働きがある、つまり“被”があると「構文として受動を可能にする」機能がある。いっばう“被”なし受動では、動詞がヴォイス特性において受動でなければならない。例えば“我被他骂了”は“我被骂了”となると、インフォーマントはおかしいと言う。そして“被”なしの“我骂了”では、まったく受動ではなくなり、“我”は受事者名詞ではなくなる。受動文とするには“被”がなければならない。だが“茶碗被他打破了。”では“茶碗被打破了。”が可能で、さらに“被”なしの“茶碗打破了。”も受動文である。この違いは、“我”が動作主に解釈でき、“茶碗”が動作主に解釈されないことによるのではなく、“骂了”と“打破了”のヴォイス特性のちがいにあるのだ。“骂了”はヴォイス特性において受動がなく、“被”なしでは受動にならない。“骂”は語彙アスペクト的には、継続動詞(非限度動詞)で、“了”の付加では非継続動詞(限度動詞)にならず、ヴォイス特性において自他両用性をもたないが“被”があると受動が可能になる。このように“被”構文の動詞形には、ヴォイス特性において異なるものが存在する点に注意すべきである。

### 2.1.2 「意味上の受動」と動詞の形態

上述のように多くの場合、受動文は“被”なし受動である。王還 1984 も、一般に受身を表す場合、“被”よりも“叫, 让”を用いることが多く、さらに“被”を用いない受動文が一般的であるとしている。劉他 1983 も、(32)にたいする(32)’のように、対応する能動文の対象となる受事者名詞を主語にとった「意味上の受動文」と、(34)にたいする(34)’のような“被”構文とがあるが、普通は(32)’のような意味上の受動文を使うとする。

(32) 他们把房间打扫干净了。 (32)’ 房间打扫干净了。

(34) 地主把卓妈打了一顿。 (34)’ 卓妈被打了一顿。

“被”なし受動と“被”構文との違いについて、劉らは“被”構文を用い

るのは、主語になる名詞が受事者ではなく、施事者 agent の意味にとられうる場合に、受事者であることを明確にするためであると説明する。(34) の受動の意味で“卓妈打了一顿。”ということとはできない。その場合〈チョマが殴った〉という能動の意味となってしまうので“被”が必要だとする。しかしこの場合“卓妈打了一顿。”はヴォイスの判断において主語が「施事者の意味にとられうる」から施事者の意味になるのではなく、そもそも動詞の形態構成から施事者の意味にしかとれないのではなかろうか。“打了一顿”はヴォイス特性から受動の意味はなく、“被”がなければ主語は受事者にならないのだ。しかし例えば“四人帮打倒了”なら、主語は施事者にも受事者にもとりうる。“打倒了”は語彙的ヴォイス特性において自他両用性がある。劉らの記述は、このような動詞の意味分析からの説明をしていないのである。

動詞の形態については、劉らは「意味上の受動文」の構造上の特徴は、“把”構文と基本的に同じであるという。主語は特定のもので、述語は他動詞で、ふつうはハダカの動詞ではなく、状語、補語、アスペクト助詞“了”を伴うことが多い。これは意味上の受動文も“把”構文と同様、事物への処置や影響を述べるからだと言う。実際、多くの場合“把”構文の述語動詞のままで“被”なし受動が成立する。例えば“我把书放在桌子上。”と“书放在桌子上。”のように。だが“我把书放到桌子上。”に対応する“书放到桌子上。”は“书放到哪儿?”の答えとならよいが、十全な受動文なのだろうか。中国人の語感では受動文であるが、“放在”“放到”の語彙アスペクト的な違いに対応してヴォイス特性の違いがあるわけで、私は“放到～”は文末“了”がなければ受動にならないと思う。例えば“我把他批评了一顿”になると“他批评了一顿”は受動ではない。つまり“把”構文の述語動詞がすべて「意味上の受動」になる訳ではない(“被”構文ならもちろん可能)。動詞(述語)のヴォイス特性によるのだ。

「意味上の受動文」の概念で問題になるのは、主語名詞が、その文で能動的動作の対象が主題化されているのか(そうであれば能動文)、それとも、その受事名詞が状態や変化の主体として述べられているか(そうであれば受動文)を、どう判断するかである。

(35) “你把信写好了吗?” “信写好了, 但还没寄出去呢。”

(36) “信写好了, 这封信一定能传达出我们的意思。”

(36)は“信”が連続した文の共通の主語であり、“信写好了。”は受動文と解



積しうる。しかし(35)は“信写好了,但还没寄出去呢。”だけを見ると、たしかに“信被写好了,但还没被寄出去呢。”の意味だが、“你把信写好了吗?”の質問にたいする答えなのだから、目的語名詞が主題化された能動文と言える。しかし劉他 1983 では、(35)も(36)も「意味上の受動」とする。筆者は(35)は目的語が文頭に置かれた主題化文と考えたい。が、中国人の語感とは違う。同僚の劉乃華氏は、劉月華らと同様に(35)も受動だとする。ここには、動詞の形態構成が“写好了”であること(受動のヴォイス特性をもつ)が、影響しているらしい。

劉ら 1983 が「意味上の受動文」とする文をさらに見てみよう。

(37) 练习我作完了,生词还没预习。

(38) 今天的报放在哪儿了?

(37) の“练习”、(38) の“今天的报”は、受事者である。しかし(37)のように“练习”が“生词”に対照されているので、これは対象名詞が主題化された対照主題である。なぜならこの場合“被”なしで動作者名詞が現れているし、例えば“练习我作了,课文还没预习。”のように言うこともでき、この場合明らかに主題化文だからである。にもかかわらず劉らは「意味上の受動」としている。それは述語の構成が“作完了”“放在哪儿了”であるからではないかと考えられる。

劉ら 1983 が受動とする文にはかなり疑問の余地がある。その原因は、事実上動詞形態(述語は他動詞で、ふつうはハダカの動詞ではなく、状語、補語、アスペクト助詞“了”を伴うことが多い)と受事者名詞が主語という‘形式上の特徴’だけを根拠にしているからである。しかし、ヴォイスの同定には動詞の形態的特徴とならんで談話文法的な意味を吟味すべきなのだ。この点は鷺尾・三原 1997 が、「ヴォイスという概念が、厳密な意味で文法理論に属するものであるかさえ明らかでない」とすることと関係している。

劉ら 1983 の記述のもう一つの問題は、「意味上の受動」における動詞を他動詞と説明している点だ。これも形式主義である。中国語においては、英語や日本語のような能動・受動における動詞形態の違いが存在しない。だから動詞は同形である。同形である以上、それは一つの動詞だから、受動で使われても他動詞だということになるのだろう。もしこの議論を敷衍すると、その文が受動であるかどうかは動詞から判断することができない。

「その文が受動文だから、受動形と解釈される」にすぎないことになる。

しかし実際には、劉らはある動詞形の受動的特性から受動の判断をしているように思える。

意味上の受動を形成する動詞の特性は、さきの“骂了”が“被”と動作者名詞の付加で受動となるのとは事情が異なる。動詞は“被”および動作者名詞なしで受動になりうる。つまり動詞のヴォイス特性に受動性が備わっているのである。だから、一般に、(39)(40)のように、主語が仕手と解釈される可能性がない場合には“被”構文は使わない。

(39) 任务完成了。 (39)' 我们把任务完成了。

(40) 粮食产量提高了一倍。 (40)' 我们把粮食产量提高了一倍。

これらを“被”構文にして“信被写好了。”“任务被完成了。”“粮食产量被提高了一倍。”というとならずであり「不愉快あるいは被害的な」<sup>(16)</sup>意味となる。次も同様だ。

(41) 门开了 (41)' 门被开了

劉乃華氏によると(41)'は〈閉じられているべきものが何者かに開けられた〉意味になる。(41)にはこうした被害や不都合な意味はない、自然な自他両用動詞による受動である。

“打破了”“写好了”は動詞に結果補語とアスペクト辞の付加されたものだが“完成了”“提高了”“开了”は補語はなく、アスペクト辞の付加だけである。劉らは「意味上の被動」の構造特徴は基本的に“把”構文と同じとしている<sup>(17)</sup>。この点は、単独動詞については首肯できる。つまり“把”構文で使える単独動詞はいわゆる「結果」(使役的状态変化、結果の状態等)を意味する動詞(“完成了”“提高了”“开了”はこれに相当)に限られる。これらの動詞は“了”の付加だけで自他動両用のヴォイス特性をもつので、“被”なしの「意味上の受動」が可能となるのだ。

### 2.1.3 自他動両用動詞とヴォイス

“完成了”“提高了”“开了”など他・自動(能動・受動)同形のものについて、劉ら 1983 は他動詞としてしか説明していない。しかし我々はこれを自他動同形(自動詞と他動詞が同形になる)動詞としたい。趙元任(Chao 1968)もこれらの受動文のものは他動ではなく自動だと説明している。つまり能動と受動が同形である動詞は、同じ他動詞ではなく、自他動の機能をそれぞれ異にする同形動詞と考えている(p. 703)。

ある種の動詞の動作の方向はふたつあり、一番良いのは、それらは自動詞であ

って、他動詞の受動態ではないと考えることである。もっとも動作者を明示する“锁被贼给开了”のようなものは除く。たとえば“门已经开了。”では、“开”は自動詞だと考えられ、“花儿已经开了。”の“开”と同じである。同じような例、水泼得一地...（後略）

趙元任は「自動詞であって、他動詞の受動態ではない」としているが、われわれが日英語のヴォイス分析で見たように、日本語では自他動同形動詞の自動が自動構文をなす場合、ヴォイスの視点からは受動態と見ているので、この立場から見れば、中国語も同様に受動と考えられる。

自他動両用の動詞は、動詞意味論から見ると特別な性質をもっている。アスペク的な特性としては、いわゆるヤホントフの言う限度動詞（終端をもつ動詞）の性格をもち、過程的状态変化をもたらす動詞である。そしてヴォイス的特性として、能動・受動が可能な特性をもっている。自他動両用動詞は、鵜殿 1982 で指摘したように、アスペクト辞“了”の付加によってその性質を獲得する。“了”が付加されなければ、自他両用とはならない。(42)'は〈北京は解放される〉という受動の意味は十全ではなく、それには(42)でなければならない。また(42)'の“人民公社成立”も明確な受動とは言えない。

(42) 北京解放了。／人民公社成立了。

(42)' 北京解放。／人民公社成立。

このように自他両用動詞への“了”の付加が、ヴォイスの両用性を獲得させるのだが、一般動詞にはこうしたヴォイス特性はなく、“了”の付加で受動になることはない。例えば“大家把他批评了一顿”は“他被大家批评了一顿”と“被”構文は言えるが、“他批评了一顿”は〈かれは批判された〉という意味にならない。“批评了”は“了”が付加されているが、自他両用動詞でなく、受動のヴォイス特性はないからである。

#### 2.1.4 助動詞＋動詞による受動

一部の動詞は“了”をとともなわず、自他両用の働きをすることができる。これらは状態変化動詞ではなく、主語名詞の性質を述べたり、恒常的な活動を表す動詞である。

(43) 华人的活动往往在方言集团之内进行。〈華人の活動は方言集團の中で行われる〉

(44) 传统的住房叫院子。〈院子と呼ばれる〉

このような恒常的な活動や状態を表す動詞は限られている。しかし動詞に可能の助動詞が付加すると、主語の可能的性質を表すことができる。鶴殿 2001 の用例から見てみよう。

(45) 中国的地形可以分成三段。〈地形は三段階に分けられる〉

(46) 小麦要磨成面。〈小麦は挽いて麵にする必要がある〉

(47) 籼米没法儿用筷子夹。〈インディカ米は箸でつまみようがない〉

以上は助動詞に動詞＋補語のついた動詞形のものだが、動詞部分が単独の場合もある。

(48) 一家往往有好几辆自行车, 所以用不着共用了。〈自転車は共有する必要はない〉

(49) 面和上水就像粘土那样可以擀。〈麵は粘土のように打ってのばせる〉

このように“可以”“没法儿”が使われ対象名詞の可能的性質を表す場合や“要”“用不着”が使われ対象名詞の内在する性質を表している場合、受動と解することができる。可能助動詞では“可以”が多く使われる。なお次のように対象名詞を主語にとる“是～的”文も、主語名詞の性質を表し、受動と考えることも可能かもしれない(半信半疑であるが)。

(50) 普通话一般是在学校学习的。〈標準語はふつうは学校で習うものだ〉

(51) 这首歌是在课堂上唱的。〈この歌は教室で歌うものだ〉

このような広義の助動詞による受動は、“被”構文や「意味上の受動」のように動詞に後置成分が必須ということはない。前置的助動詞がそれらに代替しているからである。

“打破了”のように補語構造をもつ動詞形は多く状態変化を表したが、これら“可以～”のものは、状態・性質を表している。もっとも動補構造の動詞形でも状態の意味はある。

(52) 椅子放在桌子旁边。〈椅子は机の横に置いてある〉

(53) 周扒皮已经被打得半死。〈周扒皮はもう半殺しにされている〉

(54) 天安门城楼上被朝霞涂上了一层红色。〈天安門上は朝焼けで真赤に染まっている〉

#### 2.1.4 “让”と能動・受動

“可以”は動詞の直前に置かれ、“被”が動詞の直前に置かれた場合(例：我被骂了一顿)、と同様に助動詞と解釈される。しかし“被”は“叫”“让”

と同じように動作者名詞の前に置かれた場合、“叫”“让”と同じ兼語的動詞と解釈しうる。ところで“被”構文の動作者名詞は主語名詞に影響や状態変化をもたらす者であったが、“叫”“让”では“被”構文と同じように動作者名詞が主語に向かう受動の場合のほかに、主語名詞は使役主となって動作者の影響や状態変化は他に向かう使役の場合とがある。自動詞では使役と解釈される。

(55) 我让他走了。〈私は彼に行かせた〉 使役

(56) 我让他到医院去了。〈私は彼に病院に行かせた〉 使役

(57) 对不起,叫你久等了。〈すみません、お待たせしました〉 使役

他動詞の場合、受動と使役の解釈が分かれる。主語が無生物なら、通常は受動である。

(58) 东西都让人搬走了。〈物はみな持ち去られた〉 受動

しかし主語名詞が人で、“叫”“让”のうしろの名詞も人であり、主語名詞と動詞が動賓関係であり得る場合は、解釈が分かれる<sup>(18)</sup>。(59)は受動、(60)は使役である。

(59) 那只狗叫人摸弄惯了。〈その犬は人に弄られるのに慣れてしまった〉

(60) 那只狗现在叫人摸弄了,以前可不行。〈その犬は今は人に弄らせるようになった〉

どのような場合に受動の解釈になるのか? どうやら動詞の形態構成が“叫”“让”がなくとも「意味上の受動」として成り立つヴォイス特性をもつ場合には、受動が成り立つらしい。(59)は“那只狗摸弄惯了。”と言える。しかし動詞の形態構成が“叫”“让”がなければ受動とならないものもある。この場合も(61)のように“了”があると、受動の解釈になりやすく(62)のように動詞がハダカの場合には、使役の解釈を得る。

(61) 你怎么让人打了? 〈君はどうして人に殴られたんだ?〉

(62) 你怎么就这样让人打? 〈君はどうしてこんな風に人に殴らせるんだ〉

“叫”“让”は基本的には伝達動詞として使役を表し、動詞が他動詞で一定の条件(動詞の形態構成、主語名詞と動詞の意味関係等)がある場合に受動になりうる。英語の“have”構文においても受動は使役より制限がある<sup>(19)</sup>。重要なのは“叫”“让”によって、動詞にないヴォイスが構文的に拡充されることである。即ち自動詞に対して“叫”“让”構文は使役としてそれを能

動にし(行く→いかせる)、また他動詞にたいしては、動詞を受動にする働きをする(この場合は動詞の形態の制限がある)。前者は日本語の助動詞「せる、させる」、後者は助動詞「れる、られる」の働きに相当する。“可以”の場合は、他動→自動の方向であったが、“叫”“让”構文は、双方の方向(自動→他動、他動→自動)への働きをもつわけである。

## 2.2 中国語動詞のアスペクトの意味とヴォイスの意味

中国語動詞は動詞意味論から見て、英語等と異なる特徴がある。すなわちプロトタイプ的な他動を表すのに、“提高, 解放, 开”など状態变化的使役の意味のものを除いて、多くの場合動詞単独で表すことができない。中国語では〈対象への影響、状態変化、結果の残存〉を他動が表すには、しばしば状語・補語・アスペクト助詞“了”等の付加が必要だ。

影山 1996 は、状態变化的使役を表す動詞の意味概念構造の分析において、例えば英語の“turn on the light”と日本語の「電気をつける」の違いを次のように説明している<sup>(12)</sup>。両言語の使役的状态変化動詞のアスペクト的意味の違いを説明するために、同じ使役的状态変化でも語彙概念構造を「X CAUSE Y」ではなく、「X CONTROL Y」とすると、英語の場合は、結果に焦点があるため結果状態(電気がついた状態)までの意味になり、日本語は行為に焦点があるので結果状態を意味する場合もあるし「電気をつけたがつかなかった」のような結果状態を意味しない場合もあることを説明できるとする。英語と日本語での達成動詞(Vendler 1967 の分類)には、こうした意味構造の違いがある。

この場合、中国語では、英語や日本語では一つの動詞で表せる達成動詞的な意味を、単独動詞で表しにくい。「電灯をつける」は“打开电灯”もしくは“打开开关”〈スイッチを入れる〉のように単独動詞+結果補語の“打开”という形になる。語彙アスペクト的には“打”は行為だけで結果を意味しない。“打开”では結果への行為を意味するが、“打开”だけでは「ついた」状態までを意味しない。“他打开电灯, 但电灯没打开。”は可能である。“打开了”となって、「ついた」状態までを意味する。したがって語彙アスペクト的には“打开”は「つける」であって、“打开了开关<sup>(13)</sup>”は〈スイッチを入れた〉であり結果状態まで含む。ともあれ動詞意味論的に見て、中国語では“打开”が一つの達成動詞に相当するわけである。

単独動詞が、過程的な状態変化を表せる場合もある。例えば“热了”“冷

了”“掉了”などである。しかしこれらも、アスペクト助詞“了”の付加がなければ状態変化を表せない。一般の行為動詞が達成の意味を表す場合、多くの場合補語が必要である。例えば「煮る」に対して「煮える」を表すには“煮好(了)”“煮熟(了)”となる。日本語においては、「煮る」と「煮える」は派生他動詞と派生自動詞の関係だが、“煮”にたいする“煮好(了)”“煮熟(了)”は、結果動詞が付加された動詞形である。仮に前者“煮”を「単純形」、後者“煮熟(了)”を「結果形」と呼ぶと、「結果形」は、アスペクト的な語彙概念構造を変化させるだけでなく、同時に、ヴォイス特性を「拡張」する。すなわち、能動態と受動態の両方が可能となる。結果形が受動文を構成する場合、多くの場合は“被”なしの受動文が可能になる。“被”に助けを借りると“把”構文のレベルもしくはそれ以下の形態構成で、受動が可能になる。これは述語が動補構造の場合“了”を必要とし、単純形と結果形の間位置づけることができる。英語の動詞の形態構成による受動との違いを図式化すれば、次のようになる。

中国語では、動詞が形態構成をして結果形となり、動詞はヴォイス特性において、自他動両用の性質となる。そのレベルを仮に両動態と名づける。これは“被”なし受動を可能にする。ほぼ“把”構文の形態構成に近い。“被”構文のレベルは結果形よりも制限が弱い。結果形でなくとも“被”構文は成り立つ。結果形（意味上の受動を可能にする形態構成）のレベルで見ると、中国語の受動は、能動・受動の両動性の実現によって、可能となると言えることができる。助動詞等がついて状態を表すものは、その構文そのものによって、両動態が構成されると考えられる。

英語	中国語		
能動態——受動態	単純形	他動詞单独	単動態
	結果形	他動詞+補語等	両動態
単動態：能動だけを可能にするレベル			
両動態：動詞だけで受動が可能になるレベル			

## 注

- (1) “打死了”は動詞、結果補語、アスペクト詞による述語動詞句とする考えが中国では一般的であるが、補語・アスペクト詞などの動詞後置成分を含む全体をここでは動詞と呼ぶ。
- (2) 柴谷方良 1982「ヴォイス：日本語・英語」『講座日本語学』第10巻，明治書

院, p.256-279

- (3) 鷲尾龍一・三原健一 1997. 『ヴォイスとアスペクト』中右実編『日英語比較選書』7巻, p.3
- (4) 国語学会編『国語学辞典』東京堂、1955年、P.599。
- (5) ちなみに国語学会編『国語学大辞典』東京堂、1980年では、「ボイス」の項を高橋太郎が担当しているが、可能助動詞については“わたしには菓子がたべられない”のように動作対象が“が格”になったり、“この菓子は食べられない”のように動作対象を主語にしたりする点が受け身に近いが、“おれは菓子をくえる”と言えたり、受動の“たべられる”にたいして可能は“たべれる”という形ができつつあるなど、「ボイスからの解放課程にある」とのべている。
- (6) 王還 1985によると“叫, 让”が受動として用いられた場合、必ず動作主が“叫, 让”のあとに現れるが、“被”では現れない場合もある。口語においては、受動は“被”よりも“叫, 让”が多く使われる。
- (7) 例えば“他把花瓶插了一把花。”は“把”のうしろの名詞“花瓶”は場所で、動詞のうしろの“一把花”が受事者と記述される。しかしこの文は“花瓶”に何かをしたという文であり、“花瓶”が受事者と考えることができる。また“把”構文の対象名詞には、“小红听了, 不觉把脸红了。(=小红听了, 不觉驴他的脸红了。)”のような王力の言う「継事式」で、先行する出来事が原因で状態変化をする自動詞の主語がある。これも causative の対象ということで、受事者名詞と考えられる。
- (8) 王力 1955『中国語法理論』上、p.168
- (9) 王還 1985(p.16)による。宋玉柱『語文研究』1981第2期
- (10) 王還 1985は、“把”構文の対象名詞は、特指(筆書: specificの意味、聞き手と話し手に特定であるもの)、有定(不定のマークであっても、動作の結果生じたものなど一定のもの)の場合が普通だが、意外なできごとを示す場合、無定(筆者: 不定のマークで、話者の念頭に特定のものがいないもの、一定のもので動作の実現の結果生じるが、動作の行われていない場合)もあるとする。例: 我昨天骑车把一个小孩儿撞了。
- (11) 王還上掲書 p.47-56
- (12) 影山 1996、p.84-89
- (13) 影山太郎(于康, 张勤, 王占华译)『动词语义学-语言与认知的接点』p.81-86の訳語。
- (14) 鶴殿 1982の用語。



- (15) 劉乃華氏によると“北京解放了。”にたいし“北京被解放了。”と言えば、革命を快く思わない勢力が発言しているニュアンスとなる。
- (16) 刘月华 1983, p.481
- (17) 刘月华 1983, p.480
- (18) 王還上掲書, p.45
- (19) 鷺尾・三原上掲書, p. 51-55

## 参考文献

- Chao.Y.R. 1968. “A Grammar of Spoken Chinese”. University of California Press, Berkley and Los Angels
- ドラグノフ、A. A. (龙果夫) A・A・郑祖庆译『现代汉语语法研究。第一卷词类』科学出版社, 1955 年
- 福村虎治郎 1965. 『英語態 (Voice) の研究』北星堂
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』(日英語対照研究シリーズ・5) ひつじ書房。影山太郎(于康, 张勤, 王占华译)『动词语义学-语言与认知的接点』中央广播电视大学出版社, 2001
- 国語学会編 1955. 『国語学辞典』東京堂
- 国語学会編 1980. 『国語学大辞典』東京堂出版
- 李临定 1980. 「“被”字句」『中国语文』1980 年第 6 期 1986. 『现代汉语句型』。商务印书馆
- 刘月华 1983. 『实用现代汉语语法』。外语教学与研究出版社。
- 大河内康憲 1982. 「ヴォイス：中国語の受け身」。『講座日本語学』第 10 卷, 319-334. 明治書院
- 柴谷方良 1982. 「ヴォイス：日本語・英語」『講座日本語学』第 10 卷, 256-279. 明治書院。
- 角田太作 1991. 『世界の言語と日本語』。くろしお出版。
- 鶴殿倫次 1982 「北京語動詞の自動・他動とアスペクト辞の働き」『愛知県立大学紀要』言語文学編 15 号
- 2001 「動作者名詞をもたない他動文—文法語料として」『愛知県立大学紀要』言語文学編 33 号
- 王 还 1984. 「“把”字句和“被”字句」汉语知识讲话, 上海教育出版社, 1984
- 王力 1955 『中国語法理論』上下、中華書局
- 鷺尾龍一・三原健一 1997. 『ヴォイスとアスペクト』(中右実編『日英語比較選書』

7 卷). 研究社

ヤホントフ C. E. (陈孔伦译) 1958 『汉语的语法范畴』 上海商务印书馆

朱德熙 1982. 『语法讲义』 商务印书馆